

序論——歴史認識のグローバル研究

本書は成城大学グローバル研究センター（以下「グローバル研究センター」と呼ぶ）が、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に選定され実施した「社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成」（二〇一〇～二〇一五年度）事業の一部である「歴史認識のグローバル研究」プロジェクトによる研究成果報告書である。以下、本プロジェクトの構想・概要と本書の内容について記すこととする。

第一章 グローバル研究と歴史研究

グローバル研究センターは「二〇世紀末に明確な潮流となったグローバル化（グローバル化）を厳然たる「事実」として受け止めつつも、社会や文化がグローバル化したかゆえに出来たさまざまな深刻かつ広範な矛盾や課題について、新たな学際的かつ国際的な「グローバル研究」を構想・構築して取り組み、来たるべき「未来社会に貢献する」ことを使命」として二〇〇八年に設立された研究所である。研究センターの名称ともなっている「グローバル研究」の構想について、グローバル研究センター長である上杉富之が以下の通りまとめている。^{①②}

① 定義

グローバル化とローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしつつ進行する過程ないし現象をグローバル化と定義し、グローバル化の実態や効果・影響を実証的かつ理論的に明ら

かにする研究を「グローカル研究」と呼ぶ。

② 目的

グローカル研究を通して、いままで見過ごされてきた今日的な問題や課題をローカル（地域や地方）な視点から「対象化」(objectivity) ないし可視化するとともに、著しく均衡の崩れた「中心」（欧米社会）と「周縁」（非欧米社会）の間の関係をローカルな立場から「対称化」(symmetrize) することを目指す。

③ 意義

グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行するグローカリゼーションの実態を明らかにし、ローカルな視点や立場を強調しつつ、より柔軟な社会と文化のあり方を構想・提示することを可能とする。

上杉の構想を誤解を恐れずまとめるならば、グローカル研究とは「グローバル化が進展する中で生起する諸現象を、グローバル化が進む中でのローカルの対応といった視点から解釈する試み」、ということになる。本プロジェクトはこのようなグローカル研究の一環であり、特にグローカル研究の視点から、歴史研究の可能性を検討することを目的としたものである。

本プロジェクトは五年にわたったもので、定期的に研究会を開き議論を行った。ただし実際の研究は、グローカル研究自体が新しい概念であり、その理論的な枠組みや方法論が確立されているとは言い難いことを考慮し、上記の上杉の構想によりつつも、概念や方法を無理に統一せず、各研究者に任せることとした。このことは本プロジェクトがグローカル研究に対して消極的なアプローチをとったものではなく、むしろグローカル研究からの歴史研究について無理に枠をはめずに、その可能性を最大限に試みたいという積極性の表れであると考えている。

第二章 所収論文の概要

以下、プロジェクトの成果である本書所収論文について、グローバル研究との関連に触れながら、内容を紹介する。

本畑論文はグローバル研究と歴史研究の接点を、近年の歴史動向をから探ったものであり、グローバル研究と歴史研究の関係について示唆に富むものとなっている。

本畑は近年の歴史研究の動向として、グローバル・ヒストリーやローカル・ヒストリーの興隆をあげ、その両者に挟まれるナショナル・ヒストリーについて、その価値を認めるとともに、冷戦後のグローバル化が進展する現代においては再構築が必要だとした。そのうえで今後の歴史学ではグローバルな視座とローカルな視座が重要であるとして、その両者を結びつけるのが「グローバルな視座」だと指摘する。本畑はこの「グローバルな視座」について「グローバル・ヒストリーがローカル・ヒストリーのなかに発現し、また逆にローカル・ヒストリーがグローバル・ヒストリーのなかに発現するという双方向性を追求」するものだとしている。ただし実際の歴史研究においては、グローバルとローカルを結ぶ階層的な研究が必要であるとして、秋田茂が提唱する「グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカル」といった枠組みが有効であるとした。そのうえで本畑はグローバルな視座をもつ複数の研究例を挙げる。

最後に本畑はグローバル研究の意味について提言をおこなっている。本畑によれば歴史研究には人間の生活や思想など狭い対象に密着して「個」のあり方を掘り下げて検討してゆく方向性と、ある時代の歴史像を総体的に捉える、あるいは広がりをもった地域空間を俯瞰するような視点など「全体」を追求する方向性がある。そして

「歴史研究のめざすべきところは「個」と「全体」の双方に常に眼を配りつつ対象に迫ることであろう」とし、グローバルな視座による歴史研究について「グローバルゼーションが進む中で改めて意識化されるようになってきたローカルな（それは個人という単位も含む）契機とグローバルな契機の間を結びつけるグローバルな歴史研究は、「個」と「全体」をつなぐ歴史研究のよい例であると考えられる」としたのである。

木畑論文ではグローバル化が進展する中で新しい歴史研究の潮流を踏まえたうえで、歴史研究におけるグローバル研究の可能性が提示されており、グローバル研究からの歴史研究を進める上での指針としての意味を持つ。

浦井論文は、江戸時代から明治時代への時刻制度や時刻認識の変化を検討することで、近代化というグローバル化が進む中でのローカルとしての日本の対応を明らかにしたものである。

江戸時代には夜明けから日暮れまでの時間を6等分する時間法である「不定時法」が採用されていた。不定時法では単位となる時間が季節により一定しないが、浦井は定時法により作られた西洋の機械式時計を不定時法に向けて改良したものが作られていることを例として、江戸時代にはこの不定時法に高度に適応したことを指摘する。さらに時計が一般的でないなか、江戸では時報専用の時の鐘が十カ所に設置され一日十二回時間を報知し、市中であればどこでも聞こえるようになっており、時刻制度も発達していたとした。

このような江戸時代の時刻制度を概観したのち、浦井は明治時代に入り近代化というグローバル化が進む中での時刻制度を検討している。まず時報については、明治の中頃までは依然として時の鐘が使用されていたが、同時に新たに午砲や報時球（タイム・ボール）などが導入されており、緩やかな移行が進んでいる。また時刻認識では、一八七三（明治六）年に太陽暦と二十四時間制が、さらに一八八七（明治二十）年にはグリニッジ標準時を導入するなど、標準化が進んでいる。このうちグリニッジ標準時の導入は世界で五番目という早さであったが、

この点について浦井は「当時の日本は、二十四時間制や標準時の問題を、暦や子午線の問題などと共に、文明化の中における西洋文化の進んだ技術のひとつと見做し、政治的に有益なものとして、他国との駆け引きなしに受け入れることができた」と指摘している。

以上の時刻制度の検討を踏まえて、浦井は日本の近代化の特徴として「グローバル的なものが積極的かつ急激に取り入れられ、対するローカル的なものは、旧体制のものとして排除されていく傾向が強くなった」とした。しかし人々の日常生活に根ざしていたものは意義を変えつつも用いられたとして、明治時代に入っても使われていた時の鐘や現在でも使われている太陰太陽暦（いわゆる「旧暦」）や二十四節気などを挙げ、それをグローバル化のなかでローカルな部分を残した「グローバルなシステム」としたのである。

浦井はともすれば制度的な面が強調されがちな明治時代における時刻制度の移行について、明治時代に進められた近代化のなかでの位置づけや実際の生活においてはどう作用していたのかを検討し、近代化というグローバル化が進む中での、日本というローカルの対応を明らかにした。この浦井の研究はグローバル研究の視点からの歴史研究の例として意義深い。

篠川論文も、明治時代に近代化というグローバル化が進む中での、ローカルとしての日本の対応を検証したもので、取り上げたテーマは歴史学者の久米邦武で、特にその国体観である。

篠川はまず久米が帝国大学を追われることになった論文「神道は祭天の古俗」における国体観を検討している。そこで明らかにした久米の国体観とは①日本の「国体」の基本は万世一系の天皇による統治にあり、それを不変のものとして維持していくためには、時運に応じて変化していかなければならない、②実際にこれまでの歴史において、「国体」の基本を変わず維持してきたことこそが、日本の誇るべき「国体」である、といったものであった。

さらに篠川は一九八一（明治二四）年に起こった久米事件以後の久米の国体観について検討する。久米事件は「神道は祭天の古俗」を批判した神道家が久米の自宅を訪れ長時間にわたり抗議した事件である。これを契機として久米は「神道は祭天の古俗」を取り下げることになり、さらに篠川によると「国体」という言葉を使わなくなる。篠川はこの事件以降の久米の言動を検討し、久米は上記のような「国体観」をもちながらも、やがて「国体」という言葉に意味の曖昧さ、その誤用があるという意識を持つようになり、さらには当時の「国体論」や「国体」という言葉に批判的でさえなっていた、としている。

明治時代の日本はグローバル化が進む世界に参加し、国民国家として脱皮していくことが急務とされ、その中心に位置づけられたのが天皇であった。そこで盛んに利用されたのが「国体」という言葉であるが、篠川は久米邦武を通して明治時代における「国体」という言葉のあり方を描き出している。グローバル化としての近代国家に、ローカルな存在としての天皇を結びつけるうえで「国体」という言葉は利用されたわけだが、篠川論文はその実態を明らかにしたものである。

外池論文は長慶天皇陵比定過程を検討する氏の研究の一環であり、本論文では臨時陵墓調査委員会による答申案について検討している。

長慶天皇は南朝第三代の天皇とされるが、即位したかどうかは議論が絶えなかった。しかし大正時代に入り即位したことが証明され、一九二六（大正十五）年に皇統に加えられた。そのため陵墓の比定が必要となり、一九三五（昭和十）年に設置された宮内大臣の諮問機関である臨時陵墓調査委員会で審議されることとなった。外池はこの臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵比定過程の検討をおこなっており、委員会の設置から長慶天皇陵であるという伝説をもつ地点の検討までの時期については「臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵の調査——設置から「伝説箇所」の審議まで——」（『日本常民文化紀要』二十九輯 二〇一二年）として公表されている。本

稿はこの論文を継ぐものであり、宮内大臣への答申の前段階である七点の答申案の検討が行われている。

外池は答申案の検討から、長慶天皇の陵墓については「京都府右京区嵯峨天龍寺角倉町所在慶寿院趾」が有力だとされるが、十分な立証が行えなかったことを明らかにした。そのため天皇陵を認定するために「擬陵」という考え方が浮上してくることを指摘し、この「擬陵」を検討するのが次の課題とした。

先の篠川論文でも触れたが、明治維新後の日本は近代国家への脱皮を図り、その中心となったのが天皇であった。大日本国憲法で天皇は「万世一系」とされたことから、歴代天皇の陵墓の比定は政府にとって大きな課題となったのであり、外池論文はこのような陵墓比定過程を明らかにするものである。近代国家は十九世紀以降の世界の潮流となり、その意味でグローバルな存在であった。しかしそれを維持するためには国ごとの対応、すなわちローカルでの対応が必要とされ、日本では天皇制が選択されたのである。外池の論文は、このようなローカルな対応としての天皇制を維持するために、国家が行った施策の実態を明らかにしたものである。

田嶋論文はグローバル研究の視点から、第一次大戦と民族運動の関係を検討したものである。

田嶋は第一次大戦を「人類が初めて体験するグローバルな戦争」とするが、同時にこのグローバルな戦争が、ローカルなレヴェルの民族運動に政治的な影響を与え、やがてこのローカルな民族運動はグローバルな「帝国」を拘束するようになったと指摘する。そしてこのようにグローバルな現象とローカルな現象が相互に関連して進出した第一次世界大戦は「グローバルな戦争」でもあったと位置づけている。そしてその実態を明らかにするためにドイツ帝国の世界戦略と「満蒙独立運動」の関係を取り上げている。

田嶋によると、中国政府が一九一七年まで宣戦布告をおこなわなかったこともあり、ドイツは中国でさまざまな政治工作を行った。その中には「中立国中国という政治空間を利用した協商国への政治的・軍事的謀略計画」があり、田嶋はこの点について詳述している。

ドイツの工作とその結果についての具体的な内容は本論に譲るが、田嶋がこの論文のなかでグローバルとローカルを意識した記述を行っていることは、歴史研究におけるグローバル研究の実践例として興味深い。

小澤論文は十九世紀後半から二十世紀初頭に欧米や日本における東洋美術コレクションの形成を取り上げたものである。

小澤は東洋美術コレクションが、十九世紀後半にグローバル化が進む中で東洋美術に興味を持つコレクターを生み出し、さらにそれを支える紹介者や美術商といった人々が世界的に活動することで形成されたとし、東洋美術コレクションの形成をグローバル化の進展の中で起きた歴史的な現象とした。同時にその過程では東洋美術というローカルな価値をもつ作品が、欧米に受容されることで、グローバルな価値を獲得したことも指摘している。小澤が指摘した東洋美術コレクションの形成は、欧米の価値観の世界的な拡張とされるグローバル化ではあるが、欧米以外のローカルな価値観が世界的に拡がりをもつ事例となっており、上杉が指摘する「グローバルとローカルの相互作用」の実例としての意味を持つ。

おわりに

以上、本プロジェクトの構想と成果について概観してきた。

冒頭でグローバル研究について上杉の構想からもわかるように、グローバル研究は冷戦が終わり、さらにインターネットに代表される通信技術の発展のもとで急速に進んだグローバル化をどう捉え、また対応するべきなのか、といった問題意識により構想されたものである。歴史研究においてグローバル化への対応はグローバル・ヒストリーの隆盛として最も現れており、地域や国家の歴史を越えた研究方法や記述が模索されている。このよう

な国家や地域を越えて相互の関連に注目した成果は、本書のなかで木畑が指摘しているように、これまでの「世界史」の枠組みのなかでも生まれてきた。しかし近年の歴史研究が、専門化が進み、精密さを増す中で、世界的な視点への配慮を欠いていたことは否めない。一九九〇年代以降のグローバル化の進展は、近代以降の歴史学が基本的な単位としてきた国家や地域を越えたより大きな枠組みの存在を強烈に印象づけたのであり、今後の歴史研究は、グローバル化に対応した歴史研究、すなわちグローバル・ヒストリーを意識せざるを得ない。

同時に、やはり木畑が指摘しているように、ローカルやナショナルといった階層における歴史研究は今後とも深められるべきである。そのうえで、各階層における歴史研究とグローバル・ヒストリーを具体的な研究においてどう結びつけるかが、今後の課題となる。その意味で両者を結ぶ中間的な「グローバル研究」の視点は、今後の歴史研究における一つの可能性を示すものといえる。本書はそのようなグローバル研究からの歴史研究の試みである。

註

- (1) 成城大学グローバル研究センターサイト「理念・目的」ページ (<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/mission-vision/>、二〇一六年二月十五日閲覧)
- (2) 上杉富之「序論」(上杉富之編『グローバルリゼーションと越境』グローバル研究叢書四、二〇一二年、所収)